特別シンポジウム（組織委員会企画）OS07

放射線を利用した画像診断・治療の最前線

Frontiers of Diagnostic Imaging and Therapy Using Radiation

久下　裕司[1]，秋澤　宏行[2]

[1]北大アイソトープ総合セ，[2]北医療大薬

医療の実践においては、診断により病態を的確に捉え、その情報を基に適切な治療を施すことが重要である。放射線は、医療の主な骨格をなすこれら診断、治療に役立てられ、その応用範囲は広がり、各々の技術が大きな進歩を遂げてきた。現在、核医学分野の診断の面では、FDG-PET が急速に普及しているが、機能診断という特徴を活かし、病態を様々な新しい角度から把握する新しい試みが行われ、治療の面では、近年の二つの放射性医薬品の保険認可とその後の臨床成績から、RI 内用療法の重要性がさらに確かなものとなった。また、そうした診断、治療の質の向上を目的として体内動態制御をも加味した放射性医薬品開発研究が行われている。外部照射による放射線治療では、動きを伴う組織への照射をも可能とする技術が確立、更にその洗練化が図られ、一方で、加速器や原子炉などから得られる粒子線を利用した治療法は、その実績を積み重ね、保険適用を目指す段階に入ってきている。

本シンポジウムは、放射線を利用した画像診断・治療に関する情報の更新、そして、診断とそれに基づく治療の重要性を再認識し、こうした領域に薬学関係者が如何に寄与できるかを考えていただく場を設けることを目的として企画した。様々な制約のため、該当分野の全てをカバーできていないが、多くの方々に放射線を利用した画像診断・治療について考え、議論する場としていただければ幸いである。